



SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

川瀬巴水

KAWASE HASUI Travel and nostalgic landscape

旅と郷愁の風景



2021年
10月2日(土)
12月26日(日)

川瀬巴水

「今の私に何が好きだと聞かれましたら

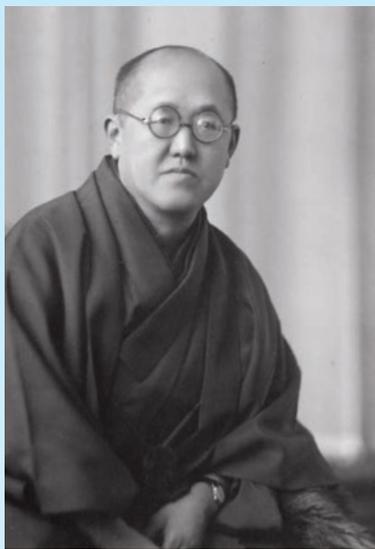
即座に旅行！と答へます」——川瀬巴水

旅情詩人と
呼ばれた画家

大正から昭和にかけて活躍した版画家・川瀬巴水(1883～1957)の回顧展です。巴水は、微風に誘われ、太陽や雲、雨を友として旅に暮らし、庶民の生活が息づく四季折々の風景を生涯描き続けました。それは近代化の波が押し寄せ、街や風景がめまぐるしく変貌していく時代であって、日本の原風景を求める旅でもありました。

その版画制作を支えたのが、浮世絵版画にかわる新しい時代の版画「新版画」を推進した版元の渡邊庄三郎でした。二人の強固な制作欲は、海外にも通用する木版「美」の構築をめざし、今や巴水の風景版画は、郷愁や安らぎをもたらす木版画として多くの人々に愛されています。

本展覧会は、初期から晩年までの木版画作品より、まとめて見る機会の少ないシリーズ(連作)を中心に構成し、巴水の世界へ誘います。伝統木版技術を駆使した詩情豊かな版画群は、都会のしばしのオアシスとなることでしょう。



川瀬巴水 1939(昭和14)年7月 56歳

開催概要

日時指定入場制

事前に美術館ホームページより日時指定のオンラインチケットをご購入ください。
入場無料の方も日時指定のオンラインチケット(無料)を取得のうえ、ご来館ください。

展覧会名	川瀬巴水 旅と郷愁の風景 KAWASE HASUI Travel and nostalgic landscape
会場	SOMPO美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 新宿駅西口より徒歩5分
会期	2021年10月2日(土)～12月26日(日) 会期中に一部展示替えあり 【前期】10月2日～11月14日 【後期】11月17日～12月26日
休館日	月曜日、11月16日(火) ※展示替えのため
開館時間	午前10時～午後6時(最終入館は午後5時30分まで)
観覧料	オンラインチケット 一般：1,300円、大学生：1,000円 当日窓口チケット 一般：1,500円、大学生：1,100円 ※高校生以下、身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳をお持ちの方はご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳をお持ちの方はご本人のみ無料です(いずれも要予約、入場時要証明)。 ※時間枠の定員に空きがある場合に限り、美術館受付で当日窓口チケットを販売します。
主催	SOMPO美術館、毎日新聞社
協賛	損保ジャパン
特別協力	渡邊木版美術画舗
資料提供	大田区立郷土博物館
企画協力	ステップ・イースト
美術館ホームページ	https://www.sompo-museum.org/
お問合せ	050-5541-8600(ハローダイヤル)

本展の見どころ

1 巴水の神髄、風景木版画約280点を展示!

堅実な写生と抒情的感性が高度な木版技術と融合した巴水の風景木版画は、今なお国内外の多くのファンを魅了し続けています。本展では、生涯に残した600点を越える木版画作品の中から、厳選した約280点を展示、会期中、前期・後期と一部作品を入れ替えて紹介します。

2 シリーズ(連作)で巴水とともに巡る旅!

巴水の木版画の多くは、ふるさとの東京や、旅で描いた風景をシリーズという形で結実させたものです。選定された作品を展示する従来の展覧会に対し、本展では代表的なシリーズを可能な限りまるごと展示、巴水とともに日本全国の旅を楽しみながら、シリーズ鑑賞の醍醐味を堪能いただけます。

◎出品予定の主なシリーズ ※〔 〕内は、前期・後期の出品予定

・『旅みやげ第一集』	1919～1920(大正8～9)年	(全16図)	(展示替えなし)
・『東京十二題』	1919～1921(大正8～10)年	(全12図)	(展示替えなし)
・『東京十二ヶ月』	1920～1921(大正9～10)年	(全5図 未完)	(展示替えなし)
・『旅みやげ第二集』	1921(大正10)年	(全28図)	(後期のみ出品)
・『日本風景選集』	1922～1926(大正11～15)年	(全36図)	(後期のみ出品)
・『旅みやげ第三集』	1924～1929(大正13～昭和4)年	(全26図)	(展示替えなし)
・『東京二十景』	1925～1930(大正14～昭和5)年	(全20図)	(展示替えなし)
・『東海道風景選集』	1931～1947(昭和6～22)年	(全26図)	(前期のみ出品)
・『日本風景集 東日本篇』	1932～1936(昭和7～11)年	(全24図)	(前期のみ出品)
・『日本風景集II 関西篇』	1933～1943(昭和8～18)年	(全24図)	(展示替えあり)
・『新東京百景』	1936(昭和11)年	(全6図 未完)	(前期のみ出品)
・『朝鮮八景』	1939(昭和14)年	(全8図)	(前期のみ出品)

3 巴水の木版画の世界を多角的に紹介!

本展では木版画作品だけでなく、木版画のもとになった写生帖、木版画制作のプロセスが分かる順序摺、制作に使用した版木、生前の巴水の制作風景を撮影した記録映像などの資料と共に、川瀬巴水の木版画の世界を多角的に紹介します。

※図版の作品所蔵先はすべて渡邊木版美術画舗

新版画と渡邊庄三郎

江戸時代に誕生した浮世絵は、明治に入り西洋から流入してきた石版、銅版、写真術に押されて衰退していきます。これを憂えた版元・渡邊庄三郎は、絵師・彫師・摺師の三者が協働する伝統的な木版技術の復興と版画の普及を目指しました。そして、創作的芸術を本位とする新しい時代の浮世絵版画「新版画」を提唱。渡邊は、優れた絵師を求めて日本画家、洋画家、外国人画家にも声をかけ、かつての浮世絵よりも絵師の個性を重視し、木版表現を第一に尊重するスタンスで制作を進めました。ジャンルは現代性を盛り込んだ風景画、美人画、役者絵、花鳥画と展開しましたが、とりわけ風景画は人気が高く最も多く制作されました。彫りと摺りの高度な技術に支えられた作品群は国内外で高く評価され、主なマーケットであったアメリカでの評判は1930年代半ばに頂点に達します。川瀬巴水は風景画の代表絵師として、渡邊庄三郎とともに新時代の意匠を凝らした画風や新たな手法にも挑戦し、40年にわたる共作を続けました。

主な参考文献

高木源「最後の版元 浮世絵再興を夢見た男 渡邊庄三郎」講談社 2013年、『生誕130年 川瀬巴水展 郷愁の日本風景』(展覧会図録)千葉市美術館 2013年、『川瀬巴水木版画集』阿部出版 2017年(初版2009年)、清水久男『川瀬巴水作品集 増補改訂版』東京美術 2019年(初版2013年)、『別冊太陽 川瀬巴水 決定版 日本の面影を旅する』平凡社 2019年(初版2017年)

／ 川瀬巴水 略年譜 ／

1883 (明治16) 年	0 歳	5月18日、東京市芝区露月町(現、港区新橋)の糸屋兼糸組物職人の長男として生まれる。本名は文治郎。 小学生の頃から絵を見たり描いたりするのが好きな少年であった。
1908 (明治41) 年	25 歳	日本画家の鏑木清方に入門を希望するが、巴水の年齢を理由に許されず、洋画を勧められる。白馬会の葵橋洋画研究所に通いつつ、洋画家の岡田三郎助の指導を受ける。
1910 (明治43) 年	27 歳	再度、清方に入門を懇願して許される。 約2年後、清方から「巴水」の画号が与えられる。
1917 (大正 6) 年	34 歳	吉川ウメと結婚、芝区愛宕下町に住む。
1918 (大正 7) 年	35 歳	「郷土会第四回展」で、同門伊東深水の渡邊版木版画集『近江八景』を見て感動する。師清方の承諾を得て、版元渡邊庄三郎のもと、「塩原三部作」で木版画デビュー。
1920 (大正 9) 年	37 歳	旅に取材した最初の連作『旅みやげ第一集』完成。
1921 (大正10) 年	38 歳	『東京十二題』が完成。『東京十二月』を制作、5作目を発表するも未完に終わる。 『旅みやげ第二集』完成。
1923 (大正12) 年	40 歳	9月1日、関東大震災。写生帖188冊や画業の成果を家財とともに焼失。 渡邊庄三郎に勧められ、10月22日から翌年2月3日にわたる生涯最長の旅に出る。
1930 (昭和 5) 年	47 歳	アメリカのオハイオ州トレド美術館主催の現代日本版画展に92点出品、1936年の同展にも出品。馬込町平張(現、大田区南馬込)に洋館づくりの家を建てる。 復興途上の東京を主題にした『東京二十景』完成。
1931 (昭和 6) 年	48 歳	『東海道風景選集』(1931～1947年)の制作開始。
1936 (昭和11) 年	53 歳	渡邊版『日本風景集 東日本篇』(1932～1936年)完成。『新東京百景』を6図制作するも未完に終わる。
1943 (昭和18) 年	60 歳	『日本風景集Ⅱ 関西篇』(1933～1943年)完成。
1944 (昭和19) 年	61 歳	空襲が激しくなり、巴水夫妻は栃木県塩原へ疎開、1948年に東京に戻る。
1953 (昭和28) 年	70 歳	前年、文部省が木版画技術記録を永久保存することを決定し、無形文化財技術保存記録木版画《増上寺之雪》が完成。
1957 (昭和32) 年	74 歳	11月27日、胃がんのため、東京都大田区池上町(現、大田区上池台)の自宅にて逝去。絶筆の《平泉金色堂》は死後に完成、百ヶ日の法要で友人知己に配られた。

第1章 版画家・巴水、ふるさと東京と旅みやげ

幼少より絵を好んだ巴水(本名 文治郎)は、十代半ばに画家を志望しますが、糸組物職人の跡取りであることから周囲に反対されます。しかし、画家への夢を捨てきれず、父親の事業の失敗を契機に、家業を妹夫婦に譲って絵の道を志します。日本画、洋画を学び、27歳にして鏗木清方に正式に入門、「巴水」の画号を授かります。日本画修業を積みながら進むべき方向を模索していた頃、同門の伊東深水の連作木版画『近江八景』(1918年)に感銘を受けます。木版画制作に強い興味を抱いた巴水は、深水の連作を手がけた版元・渡邊庄三郎のもとで、幼い頃から慣れ親しんだ地を題材に「塩原三部作」を制作、これが好評を得たことを機に、渡邊庄三郎と巴水とは「新版画」という新たな芸術を目指す盟友としての関係が始まります。旅先や生まれ育った東京を描き、巴水は風景画の絵師として、新版画の制作を牽引する存在となっていきます。

『旅みやげ第一集』

(全16図)
1919～1920(大正8～9)年

第三集まで続く本シリーズは、旅にもづく初めての連作。写生旅行によって制作したことから「旅みやげ」と名づけたと巴水は語っています。第一集は、東北や北陸、房州や塩原などを取材。海、川、沼の水辺をはじめ雨や月など、巴水が生涯に好んで取り上げたモチーフがすでに登場しています。

広報用画像 2

《陸奥三島川》

旅みやげ第一集
1919(大正8)年夏
木版、紙



広報用画像 1

《塩原おかね路》

1918(大正7)年秋
木版、紙

栃木の塩原は、巴水が病弱だった幼少期に、土産屋を営む伯母夫妻が可愛がってくれた懐かしい場所。この地を題材として、版元渡邊庄三郎とともに初めて取り組んだ風景版画が《塩原おかね路》《塩原畑下り》《塩原しほがま》で、「塩原三部作」と呼ばれます。この作品には、渡邊版独特の円状にパレンの跡を残す「ざら摺」の技法が使われています。

「朝、夕、夜、水、雲などに取材した
静的な世界を私は愛する」
——川瀬巴水



『東京十二題』 (全12図)

1919～1921(大正8～10)年

名所だけに目を向けず興のおもむくままに描いたという、巴水が生まれ育った東京を題材にしたシリーズ。水辺の情景を中心に四季折々の東京が、巴水独自の視点で切り取られています。『旅みやげ第一集』とほぼ同時期に始まり、重複して制作されました。

広報用画像 3 《古ま形河岸》

東京十二題 1919(大正8)年初夏 木版、紙



『東京十二ヶ月』 (全5図 未完)

1920～1921(大正9～10)年

『東京十二題』が好評を得て、次いで企画された東京シリーズ第二弾。毎月1点を制作し、1年で完結する予定でしたが、5点のみで終了。研究的な作品群で、彫り、摺りにも工夫が凝らされたものがあり、従来とは違う丸形や正方形の版型も特徴的です。

広報用画像 4 《月嶋の渡舟場》

東京十二ヶ月 1921(大正10)年10月 木版、紙



第2章 「旅情詩人」巴水、名声の確立とスランプ

巴水の創作活動が順調に進んでいた1923(大正12)年、関東大震災が発生しました。巴水の家は全焼、写生帖188冊含む画業の成果すべてを失います。渡邊庄三郎も店を焼け出されましたが、ほどなく再建に取りかかり、巴水を励まして旅へと送り出します。これが102日間におよぶ巴水の生涯最長の写生旅行となり、この時の写生帖をもとに、続々と新たな作品を生み出していきます。まずは、震災で中断していた『日本風景選集』を再開し、『旅みやげ第三集』の制作に着手します。震災後の作風は、以前よりも色彩の明るさや鮮やかさを強調する傾向が見られ、写実的な精密さも増しています。風景木版画家として国内外の展覧会で高い評価を受けた巴水でしたが、やがてマンネリズムなどを指摘する声もあり、スランプの時期を迎えます。

『東京二十景』(全20図)

1925～1930(大正14～昭和5)年

震災直後の1924(大正13)年から1930(昭和5)年までの東京の写生をもとに制作されました。復興途上の東京を描いたもの、昔から変わらない風景を描いたもの、いずれも好評を博しましたが、とくに後者からは《芝増上寺》《馬込の月》といった大人気作が誕生しています。

広報用画像5

《芝増上寺》

東京二十景
1925(大正14)年
木版、紙

本作の題材となった芝(現・港区)の増上寺は、巴水の生家に近く、かねてから慣れ親しんだ場所でした。巴水が関東大震災直後に手がけ、「東京二十景」に収められた中でも最も早い時期の作品です。「赤いお寺に白い雪」、「和傘の女性」といった江戸の風情あふれる本作は、販売数が巴水版画の中で最大の3000枚を超えたとされるほど、絶大な人気を得ました。これ以降、巴水を模倣するような同様の画風をもつ多くの作品が制作されました。



広報用画像6 《池上市之倉(夕陽)》

東京二十景 1928(昭和3)年 木版、紙



「静かなもの、うらびたもの、うら寂びたもの、私の世界はここにある」——川瀬巴水

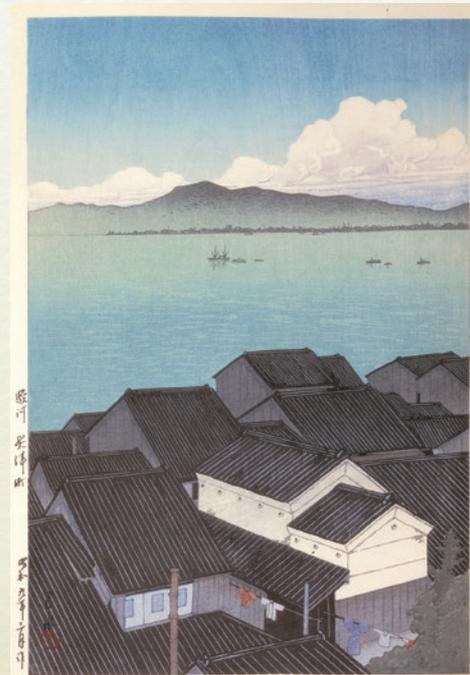
『東海道風景選集』

(全26図) 1931～1947(昭和6～22)年

本シリーズは、巴水の版画が歌川広重に似ていると言われたことが動機となって始められました。広重の『東海道五拾三次』のように各宿場を描くのではなく、東海道の各地を回りながら、心地よさを与えてくれる場所を選んで描き、巴水独自の世界を打ち出しています。

広報用画像8 《駿河 興津町》

東海道風景選集 1934(昭和9)年3月 木版、紙

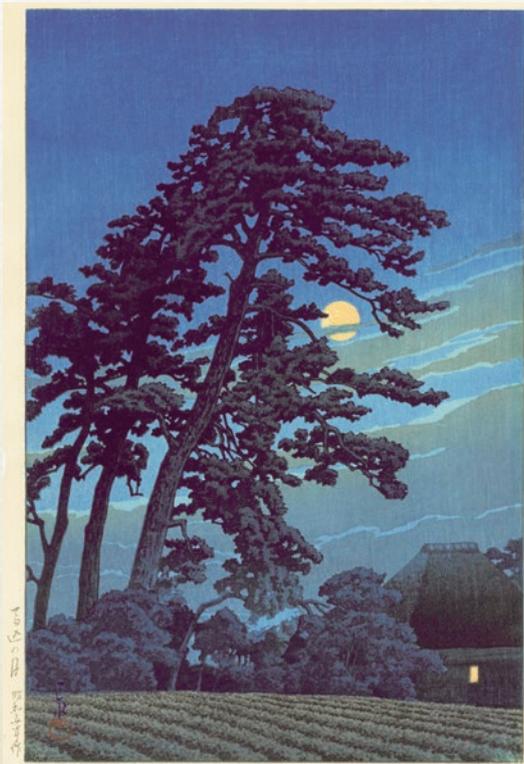


広報用画像7

《馬込の月》

東京二十景
1930(昭和5)年
木版、紙

関東大震災で家を焼失した巴水でしたが、1930(昭和5)年には、馬込町平張(現、大田区南馬込)に洋館づくりの家を建てます。本作に描かれた三本の松は、その家から徒歩20分ほどの所にありました。古くに農民が伊勢参りから持ち帰った松を植えたことに由来、長らく「三本松」と呼ばれましたが、昭和初期には全て失われ、現在は、バス停等にその名を留めています。月夜に松という情趣豊かな本作も人気が高く、《芝増上寺》に次ぐ2000枚が販売されました。



第3章 巴水、新境地を開拓、円熟期へ

制作に行き詰っていた巴水は、1939(昭和14)年、画家仲間の誘いに応じ朝鮮旅行に出かけます。初めて見る広大な風景や風俗の新鮮さに魅了され、それらの写生に基づく連作『朝鮮八景』、『続朝鮮風景』で新境地を開拓します。しかし、1941(昭和16)年の太平洋戦争勃発により、最大の輸出先アメリカとの関係が断たれ、戦時統制で版画の制作は困難となります。空襲が激しさを増す中、巴水夫妻は塩原に疎開しますが、敗戦を迎えると、進駐軍が海外へのお土産として版画を求め、空前の新版画ブームが訪れます。戦前から人気の高かった巴水の版画はよく売れ、これを弾みに渡邊との共同作業を再開します。そして1952(昭和27)年には、文部省文化財保護委員会による木版画技術記録事業の対象に巴水が選ばれるという栄誉を授かります。

『朝鮮八景』

(全8図) 1939(昭和14)年

気分転換も兼ねて1ヶ月ほどで朝鮮半島を周った写生帖から『朝鮮八景』が制作され、これが好評を得たことで、翌年『続朝鮮風景』が刊行されました。金剛山などの景勝地、仏教寺院、民族衣装の人々など、朝鮮ならではの風景が、巴水の造形世界に清新な魅力を与えています。

広報用画像 9

《金剛山 三仙巖》

朝鮮八景
1939(昭和14)年8月
木版、紙



広報用画像 10 《増上寺之雪》

1953(昭和28)年 木版、紙



1952(昭和27)年、文部省文化財保護委員会では木版画技術記録を作って永久保存することを決め、巴水がその画家に選ばれます。巴水は何ヶ所かで写生を行いました。結局、なじみ深い場所で、これまで度々手掛けてきた芝増上寺を題材に描き、妻や娘をモデルに点景人物を加えました。42度にも及ぶ精密な摺りによって、無形文化財技術保存記録木版画《増上寺之雪》は、1953(昭和28)年に試摺が行われ、秋に完成しました。

特設コーナー：スティーブ・ジョブズと巴水

アップル・コンピュータの共同創業者であり、企業家として世界的に著名なスティーブ・ジョブズ(1955～2011年)。彼は日本の新版画を愛し、なかでも川瀬巴水は、特にジョブズのお気に入りの作家でした。本展では、「ジョブズと巴水」のコーナーを設け、巴水が現代でもなお多くの人々に愛されていることを、ジョブズを通して紹介します。

参考画像 《西伊豆 木負》

1937(昭和12)年6月 木版、紙

1983年、28歳のジョブズが東京を訪れた際に購入しました。伊東深水などの美人画から巴水の風景画に関心が広がっていききっかけになった作品。本展にも同じ作品が出品されます。



「今では日本画でも洋画でもない、
写生を基とした版画に
なり切っている」——川瀬巴水

広報用画像 11

《平泉金色堂》

1957(昭和32)年
木版、紙



岩手県平泉町にある中尊寺金色堂は、すでに1935(昭和10)年作として『日本風景集 東日本篇』に登場しています。一方本作では、同じ構図の中に一人の僧侶を配した雪景に変わっています。雪が降りしきるなか石段を踏み締めるその後ろ姿は、巴水自身を象徴しているとも言われています。胃がんと闘いながらも、線描きを9回、原画も2回以上描き直し制作を進めた巴水でしたが、版画の完成を見ることなく、1957(昭和32)年11月27日、74歳で他界します。この絶筆『平泉金色堂』の版画は、百ヶ日の法要の際に、巴水の冥福を祈り、友人、知人に配られました。その5年後、渡邊庄三郎は1962(昭和37)年に逝去します。新版画を代表する絵師と版元亡きあと、技術の継承者や新しい作品を描く意欲的な作家を見出すことも困難となり、世界的な人気を博した新版画の制作は、庄三郎一代で終わることになりました。



《馬込の月》東京二十景 1930(昭和5)年 木版、紙 渡邊木版美術画舗

プレスお問い合わせ

「川瀬巴水展」広報事務局(ウインドム内)

TEL: 03-6661-9447 FAX: 03-3664-3833

e-mail: sompo-m-pr@windam.co.jp

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル4階